

ちがいと「共」に「生」きる
～バリ島のろう者の村に見る弱者とのつながり～

国際政策文化学科 3年 望月 杏樹
国際政策文化学科 3年 唐澤 凜
政策科学科 3年 米田 仁

1. 研究目的

本研究は、ろう者の村であるブンカラ村で、聴者とろう者が共に暮らす様子を調査することで、共生社会を目指す現代において「共生」とは具体的にどのような状態を指すのかについて、ヒントを得ることを目的としている。ブンカラ村は、インドネシアのバリ島北部に位置する、人口約 3000 人の小さな村であり、2024 年 9 月時点で 39 人のろう者が暮らしている。ここでは、聴者も含めた村人の約 9 割が、村内で自然発生した独自の手話である Kata Kolok を挨拶程度であれば使用できるなど、両者が共に暮らすための工夫が見られる。しかし、挨拶程度の Kata Kolok では、日常生活を送るうえでは不十分であると考えられるため、実際に両者が互いに関わり合って暮らしているのかは疑問である。以上を踏まえて、文献調査や現地調査を行い、ブンカラ村の人々は「共生」しているのか、「共生」の在り方とは何か、を探った。

2. 結論

本研究を通して、ブンカラ村の聴者とろう者は「共生」していると言えるのではないかと考えた。彼らは深く関わりあい、両者が過ごしやすい環境を整えて生活していた。また、ブンカラ村の事例から導き出せる「共生」の在り方とは「異なる両者が、互いの能力を補い合い、積極的に対話しながら生活すること」であると考ええる。ブンカラ村は、インクルーシブ教育のできる教員の不足などが課題としてあげられるように、理想的な環境とは言い切れない。しかし、グローバル化が進む現代において、村での実践は自分と異なる他者と共生するうえでのヒントとなるだろう。

3. 活動内容

プロジェクト奨学金計画書を作成し、それに基づいて文献調査や聞き取り調査を行った。現地調査では、2024 年 9 月 7 日から 11 日にかけてインドネシアのバリ島にあるブンカラ村と州都であるデンパサールを訪れ、ブンカラ村、そして都市部での暮らしや教育、雇用の実態について参与観察や現地の人々への聞き取りを行った。帰国後は、現地調査で明らかになったブンカラ村の実態について、事前調査の情報を踏まえながら、「共生」に必要なと考えられる要素を分析し、考察を行った。



インドネシアでの現地調査の様子

2024 年 9 月 7 日 村人撮影



2024 年 9 月 9 日 筆者撮影